

平成 26 年 12 月 1 日

京口門だより No. 14

今年の秋は京都で学会が開かれちょうど紅葉の時期にあたり、例年になく美しい紅葉をみることができました。急に寒くなったときがありそのせいかもしれません。紅葉がすぎれば早や師走です。気温の変化が大きく、今年の冬は風邪がおおはやりで何日も咳が続いて困った人もあります。昨年暮にも風邪は漢方薬をうまく用いると早く治ることを述べました。単に鎮痛解熱剤で熱を下げるだけのような治療はしないでください。前にも言いましたように、漢方の風邪の治療は、その症状と時期によって使う薬が異なります。一律同じ風邪薬ということはありません。先日も風邪がこじれて咳がつづくのに、葛根湯をずっと飲むように言われた人がいましたが、これは間違いです。もう柴胡剤にしないと効果はありません。

さて、年末は何かと食べたり飲んだりする機会が多いと思います。とくにお酒に負けて体調をくずす方も多いかと思えます。自分に適した量の酒でやめておくことができれば良いのですが、なかなかそうはいきません。漢方では酒毒といって、飲酒過多になるときは酒の熱毒が体中をめぐり、苦しくなったり、吐いたり、下したりするとあります。そう言われなくても実体験をする方は多いと思います。こうした酒毒を治す薬に黄連解毒湯というにが一い薬があります。この薬は中国の唐の時代に作られた薬で、そのいきさつについて面白い話が古い本に出てきます。

ある劉車という将軍が風邪をひくこと三日、汗を発して治った。治ったので好きな酒を飲んだところ、ひどく苦しくなり、吐気、口の乾き、うなり、言葉が乱れるなどの症状が現われ、横に休むこともできなくなった。そこで黄連解毒湯という薬を作って与えたら見事治ったと。

風邪の後という条件はありますが、酒の毒にあたった時には黄連解毒湯という薬を飲むのが良いとされてきました。黄連解毒湯にはオウレンの根、キハダの樹皮、クチナシの実など、苦く熱をさます薬が含まれています。ちなみにお酒の前に飲んでおくと悪酔いしないという自験例があります。しかし飲みすぎにならないように、よい年をお迎えください。

